

新 歌人群像

山川登美子

白百合の譜

青井 史



三十年の生涯

山川登美子^{やまかわとみこ}は人が八十年ほどもかけて果たすことを、わずか三十年で成し遂げて早々にこの世を辞していった歌人だ。

登美子は一八七九（明治十二）年七月十九日、福井県小浜市竹原^{たけはら}に生まれ「とみ」と命名された。父貞蔵、母糸いの四女。山川家は若狭小浜藩主酒井家に代々仕えてきた武士で、貞蔵はその七代目。維新後は第二十五国立銀行の頭取となり、家門の名誉と伝統を大切にす典型的な武士気質の持ち主だったが、和歌をたしなむなど風雅な一面もあり、この父が登美子の生涯に大きな影響を与えることと

なった。

一八九五（明治二十八）年、十六歳の時、登美子は大阪の梅花女学校（現梅花女子大学）に入学し、長姉いよの婚家先より通学した。一八九七（明治三十）年、梅花女学校邦語科を卒業。いったん若狭に戻り、三年後の一九〇〇（明治三十三年）、今度は梅花女学校の研究生として入学し、英語を学んでいる。この間、琴や生花、習字を習うかわらで、『源氏物語』などの古典を愛読し、さらに雑誌「新声」や「文庫」に短歌や詩、美文などを発表していた。若狭と大阪を往還しながら、当時としては比較的自由な娘時代を送れた背景には、父貞蔵が女性の将来に高等教育の大切さを見通していた視野の広さがあつたからだろう。



結婚写真（明治34年）

この一九〇〇（明治三十三年）四月、与謝野鉄幹による「明星」が創刊され、登美子はこの「明星」に参加、歌は二号（五月）に初めて一首載った。

鳥籠をしづ枝にかけて永き日を桃の花
かずかぞへてぞ見る

「明星」二号

良家の子女の穏やかな日常が詠まれている。この時点ではまだ鉄幹とも晶子とも面識はなかったが、以後、毎号、欠かさず作品を発表している。

八月に入って鉄幹が講演のため来阪しているが、その折、鉄幹と会い、当時はまだ鳳晶子と言った与謝野晶子とも出会い、さらに堺の浜寺で開かれた歌会にも参加している。こ

こで鉄幹、晶子に加えて河野鉄南、高須梅溪、宅雁月らと知己になり、以後「明星」の中心的な歌人となっていく。

加えて同年十一月には、鉄幹、晶子と共に京都の永観堂の紅葉を見て

のち、粟田山の辻野旅館で一泊している。三人の文学上の連帯感急速に深まったはずだ。

当然のことながらここには、二人の女性歌人の秀れた詩質を認めた鉄幹の、「明星」強化への主宰者としての思わくが働いていただろう。作家であるうえに編集者としての才覚や器量を併せ持っていた鉄幹の鋭敏な感性を窺わず。

この鉄幹の企てが、登美子にとって真実開花するのは五年後の一九〇五（明治三十八）年、与謝野晶子、増田雅子との合著詩歌集『恋衣』だった。

話を京都・粟田山の辻野旅館の一夜に戻すと、登美子はこの夜、二人に父の決めた、同じ山川一族の青年と結婚することを告げている。自分の思い入れとは別のところにいる登美子を知った鉄幹は、何を思っただろうか。登美子はこの時の心を次のように詠んでいる。

それとなく紅き花みな友にゆづりそむ
きて泣きて忘れ草つむ

「明星」八号

「友」は晶子、「紅き花」には文学や恋が象徴されている。

この十二月、彼女は若狭で仮祝言をあげ、翌一九〇一（明治三十四）年四月に上京し、舅姑同居の新婚生活が始まる。次第に欠詠がちになりながら、「明星」に発表していた歌の

中に不思議な歌がある。その中からの二首。

画筆うばひ歌筆折らせ子の幸と御親の
なさけ嗚呼あなかしこ

「明星」十号

こへ秋の日往ぬる

「明星」十七号

実は登美子は短歌を詠み始める前、画家を志していたが、父に反対され短歌を始めたといういきさつがあった。先に述べたが、女性の教養の高さが必要な時代が来るといふ貞蔵の考え方は、しかしながら良妻賢母の枠を超えるものではなかったようだ。その後、登美子は父のすすめた結婚のため、今また歌をやめなければならぬという状況下にいると「画筆」の歌は述べている。

彼女は親の心配りは十分に感じながらも、自分の人生が父によって決められていくことを悲しみ、また新婚生活にも心満たされることはなかったようだ。自らの影を見、空に愁いの心を放ち、鳩はどこへ帰っていくのか、そしてわたしはどこへ帰るのかと言っている。当時の登美子の寂しさが伝わる二首だが、しかしこうした人生を歩むことになったのは彼女自身、父に背いてまで主張していく強い自己主張、自我がなかったことも窺わず。結局、親の意に従う慎ましい女性だった。

山川登美子

ずっと後年、彼女の亡くなる一年ほど前の一九〇八（明治四十二年）年、次のような歌を詠んでいる。

矢のごとく地獄におつる躰つらきの石とも
知らず拾ひ見しかな 「明星」申歳第五号

何気なく拾った石が、「地獄におつる躰きの石」だったと言っている。自らの人生の選択を省みての実感だ。父が選んだ彼女の夫は結核となり、新婚二年ほどで亡くなってしまい、実家に復籍したのち、一九〇四（明治三十七）年、上京して日本女子大学英语科に教師となるために入学する。登美子はすでに二十五歳になっていた。翌一九〇五年、与謝野晶子、増田雅子との合著詩歌集『恋衣』を出す。しかし、その喜びもつかの間、秋には夫から感染していた結核が発病し、闘病ののち一九〇九（明治四十二年）年四月十五日に亡くなる。享年三十。疾風怒濤どよみのように過ぎた三十年だった。

『恋衣』こころ

登美子にとって生前ただ一冊の歌集で、晶子、雅子の合著詩歌集『恋衣』は一九〇五（明治三十八）年一月一日、東京の本郷書院

から出版。三人の短歌と晶子の詩六篇、その中にはよく知られている「君死にたまふことなかれ」も含まれている。登美子の章は「百合」と題し、一三一首がおさめられている。

髪ながき少女とうまれしる百合ゆかに額は
伏せつつ君をこそ思へ

わが息いきを芙蓉の風にたとへますな十三
絃いざをひと息に切る

帰り来む御魂みたまと聞かば凍る夜の千代ちよも

御墓の石いだかまし

木屋街は火かけ祇園は花のかけ小雨に

暮る、京やはらかき

歌よみて罪せられきと光ある今の世を

見よ後の千とせに

先に掲げた「紅き花」、「地にわが影」も

『恋衣』に置かれている。「髪ながき」の歌は集の巻頭の一首。登美子の詩質と「明星」調の特徴をあますことなく知らせる歌でもある。

二首目の歌は、「明星」八号（一九〇〇）明治三十三年十一月が初出だが、この歌に呼

応したと思われる鉄幹の歌「君が頬と我頬と

ふれてつきしいき芙蓉の風のゆらくと思ひ

し」が、同じ八号の「明星」に見える。鉄幹

の仮想恋愛へ女性の心を導いていく手腕はな

かなかだ。また「明星」では、「百合の君」の

ニックネームを持つ慎重しくて気品のあった



晶子と登美子（明治33年11月）

登美子の、秘めた激しさが感じられる歌でもある。ついでに言う、晶子は「白萩の君」、雅子は「白梅の君」と呼ばれた。こんな雰囲気作りも鉄幹が仕掛け人だったものと思う。

同一線上で鉄幹は、まず「みだれ髪」を出して晶子を世に送り、今度は『恋衣』で登美子と雅子を送り出そうとした。その企みは見事に当たり、『恋衣』は版を重ねた。ただし、問題がなかったわけではない。登美子と雅子は在籍していた日本女子大学を停学処分となった。ちょうど、晶子の「君死にたまふことなかれ」が国賊的だと批判されていたことや、『みだれ髪』の挑発的な恋の歌のイメージが、大学側にとっては好ましいものではなかっただろうし、『恋衣』という書名からして、当

自らへの挽歌

時としては受け入れにくいものであったはずだ。最後の歌、五首目はそんな大学へ鋭く抗議した歌で、なかなかパンチがあり、説得力もある。

こんな強さはどこから来たのだろうか。彼女は結婚し、夫に病死された。その時の慟哭は三首目の「御墓の石いだかまし」に、「定家」などの情趣を重ねながら、あますところなく詠み取られているが、その慟哭の中から立ち上がった彼女がいる。そして英語の教師となるために日本女子大学に入っている。この人生上の大きな変化が、登美子を成長させ、逞しくさせたものと思われる。

力強く一步を踏み出した登美子の前に、しかしながら過酷な運命が立ちほだかった。結核の発病に加えて、彼女の人生に大きく関わった父貞蔵が亡くなる。登美子はこの父を愛し、頼りきって生きてきた。ここで頼れるものの全てが奪い去られていったと感じたのではないか。そんな中で彼女は三年余りを病み、そして母と末の弟、亮蔵に看取られながら死んでいった。しかし彼女は自らの生命を大切に生きた。

しら珠の数珠屋町とはいづかたぞ中京
こえて人に問はまし

「明星」八十号（一九〇七明治四十一年二月）
わが死なむ目にも斯く降れ京の山しら
雪たかし黒谷の塔

「明星」八十一号（同年三月）
胸たたき死ねと苛む嘴ぶとの鉛の鳥ぞ
空掩ひ来る

「明星」申歳第四号（一九〇八明治四十一年四月）
おつとせい氷に眠るさいはひを我も今
知るおもしろきかな
後世は猶今生だにも願はざるわがふと
ころにさくら来てちる

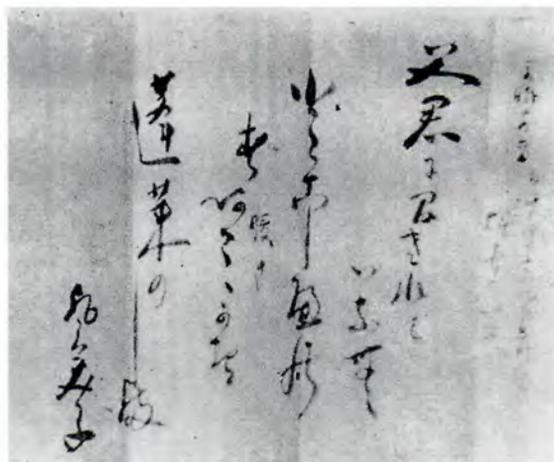
「明星」申歳第五号（同年五月）

しら珠の歌を詠んだ頃、彼女は大学を退学しているが、そんな鬱屈した心は感じさせない。伸びやかなリズムが美しい。おつとせいの歌は「父君の喪にこもりて」の詞書をもつ一連の中の一。悲しみのどん底にありながら、そして自ら高熱に喘ぎながら、おつとせいのように氷の上に寝てみたい、今初めておつとせいの幸せを知った……といった思いを、「おもしろきかな」と言い放っている。強靱で、かつユーモアの心を失わない懐の深い人間像が見える。

五首目のさくらの歌は、登美子が「明星」に発表した最後の十四首の中の一首。あの世ばかりでなくこの世の幸さえ願っていない、そんな私の懐に今桜が華やかに散つてくるといふ。世の中の全てを知ってしまったのちの究極の達観がここにはある。そして作品としてこの上なく秀れている。登美子はこの一首を詠むために生まれてきたのかもしれないと思わせるほどだ。辞世は亡くなる二日前、弟亮蔵に託された。

父君に召されていなむとこしへの春あ
た、かき蓬萊のしま

（あおい・ふみ「かりうど」主宰）



辞世の歌
父君に召されていなむとこしへの春あ、かき蓬萊のしま